慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治期の日本における中国小説史研究について：文学史における記述を中心に
Sub Title	The study of the history of Chinese novels in the Meiji era : focus on histories of Chinese literature written in Japanese
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.10 (2017.) ,p.109- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20170331-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治期の日本における中国小説史研究について

——文学史における記述を中心に

溝部良恵

一．はじめに

近代以前、中国において、小説は多くの読者を持ちながらも、詩文のような正統な文学として、正面から取り上げられ、分析、考察の対象になることはなかった。近代以降、西欧諸国の影響を受け、小説に価値が見いだされ、創作とともに中国小説史研究が行われることとなった。そしてその始まりは、魯迅が、『中国小説史略』（一九二三、一九二四年）の冒頭「序言」において、「中国の小説には従来歴史がなかった。あったとしても、外国人が書いた中国文学史にあったか、あるいは中国人の書いたものにもあったが、その記述の量は全体の十分の一にも及ばなかったので、内容は詳しくなかった[1]」と記した通りであり、とりわけ日本においては、明治三十年（一八九七）に、笹川種郎によって、中国小説史の専著『支那小説戯曲小史』が書かれ、さらに大正八年（一九一九）には、塩谷温

が『支那文学概論講話』において、中国小説史を詳細に論じ、中国小説研究の基礎が築かれた。

筆者は、こうした中国小説史研究の枠組みがいかに形成されたのかという問題意識から、以前塩谷温に大きな影響を与えたとされる森槐南の中国小説史研究について、槐南が明治二十四年（一八九一）『早稲田文学』誌上に発表した「支那小説の話」を中心に考察を行った（「森槐南の中国小説史研究について—唐代以前を中心に—」以下、前稿と称する）[2]。前稿においては、漢詩人森春濤の息子であった槐南が、幼い頃から多くの漢籍に親しんだ豊富な読書経験に基づきながら、坪内逍遥を中心に提唱された新しい小説観の影響を受け、中国における「小説」の起源にも目を配りながら、同時に中国における現代的な意味での「小説」の歴史的変遷を記述したこと、また「小説」を経書や史書の補遺ではなく、芸術として独立した一ジャンルとしてとらえていること、とりわけ、それ以前にはほとんど記述の見られなかった宋代以前の小説に関する記述は、注目に値することを指摘した。一方で、正式な高等教育を受けたことのなかった槐南の小説史研究においては、「文学史」という西欧で生まれ、明治二十年以降の日本において徐々に根付いていった概念に対し、無自覚なところが見受けられることも指摘した。

また日本では、明治三十年から四十年にかけて、中国に先駆け、多くの中国文学史が書かれた[3]。しかし明治三十年（一八九七）に出版されたまとまった通史の体裁をとる最も早い中国文学史の一つである古城貞吉『支那文学史』を始めとして、初期の中国文学史においては、小説に関する記述はないか、あったとしてもあまり詳しくはない。現在であれば、文学史の中に、小説の一項が含まれるのは、当然のことと考えられるだろう。前稿においては、このことに関して詳しく触れることはできなかった。そこで本稿においては、明治三十年から四十年にかけて日本で書かれた中国文学史を中心に、小説に関する記述を調査し、中国文学史に小説というジャンルがどのように組み込まれていくのかを考察してみたい[4]。

二　明治期日本における中国文学史中の小説に関する記述について

日本においては、明治二十三年（一八九〇）に、三上参次・高津鍬三郎の共著により、はじめて日本の文学の歴史について体系的に記した『日本文学史』（金港堂）が出版された。これは明治十年代―二十年代、つまり一八七〇年代から八〇年代にかけて、西欧における文学史の概念が受容され、その影響のもと日本文学史を構想する気運が高まったためであった。その様子は以下のように三上らの『日本文学史』の「序」から窺うことができる。

> 著者二人曾て大学に在りし時、共に西洋の文学書を繙きて、其編纂法の宜しきを得たるを嘆賞し、また文学史といふ者ありて、文学の発達を詳かにせるを観、之を研究する順序の、よく整ひたるを喜びき。之と同時に、本邦には未だ彼が如き文学書あらず。また文学史といふ者もなくして、本邦の文学を研究するは、外国の文学を研究するよりも一層困難なることを感ずる毎に、未だ曾て、彼を羨み、此を憐み、如何にもして、我国にも彼に劣らざる文学書、また彼に譲らざる文学史あらしめんとの慷慨の念、勃然として起こらざること無かりき。

そしてそれに影響を受け、明治三十年（一八九七）には古城貞吉により『支那文学史』が書かれたのをはじめとして、日本においては、明治三十年代から四十年代にかけて多くの中国文学史が書かれた。

旧来の漢学者達が、作詩や作文の手本として、好みのままに詩文を読む傾向があったのに対し、これらの著者達は、そのような立場を離れ、古今の多くの作品を読み、分析し、その継承や発展を整理し、個々の作品を位置づけ、

文学の歴史を組み立てていくことを目標としていた。とりわけ小説は、明治以前には、娯楽としては読まれても、正面から取り上げ、分析されることはなかったジャンルであり、その歴史をどのように組み立てていくのかは大きな課題であった。

日本で書かれた中国文学史については、すでに三浦叶『明治の漢学』（汲古書院、一九九八年）所収「明治年間に於ける中国文学史の研究」及び川合康三編『中国の文学史観』（創文社、二〇〇二年）所収資料「日本で刊行された中国文学史―明治から平成まで」にまとめられている。

そこで上記の書に挙げられた明治三十年から四十年前後に日本において書かれた中国文学史を中心に、小説についての記述、とくに宋代以前の小説に関する記述について調査を試みた。

範囲を宋代以前とするのは、筆者が主に唐代の小説を研究の対象としていることと、また宋代以降の白話小説に関しては、金聖嘆などによる批評が存在し、笹川種郎をはじめとして、初期の中国小説史に関する記述においては、それらが参考にされていることを考慮に入れると、宋代以前の小説史をどのように記すかは、中国小説史の形成を考える上で、重要だと思われるからである。

調査の結果は以下の通りである。取り上げた書については、一二六頁の別表「明治期日本における中国文学史」に一覧を作成した。以下番号は、表に対応する。

1・1　末松謙澄『支那古文学略史』（文学社、明治十五年、一八八二年）

〔著者略歴〕安政二年―大正九年（一八五五―一九二〇）。号青萍。伊藤博文に認められ、政界に入る。明治十一年（一八七八）から十九年（一八八六）までイギリスに留学し、ケンブリッジ大学に学ぶ。バイロン、シェリーなど

の詩を漢訳するとともに、『源氏物語』を初めて英訳、刊行した。[5]

〔内容〕同書は、明治十五年六月十一日にロンドン日本学生会において行われた講演に基づく。「古文学」としているが、「周官」「管子」「老子」など十の項目がたてられており、今日的な意味での「文学」というよりは、先秦を中心とする学術史的内容を持っている。

2・1　児島献吉郎『**支那文学史**』（同文社、明治二十四―二十五年、一八九一―一八九二）

〔著者略歴〕慶応二年―昭和六年（一八六六―一九三一）。字は士文、号は星江、一枝巣。明治二十一年（一八八八）、帝国大学付属古典講習科漢書科卒業。帝国博物館美術部員を経て東京府立第一中学校に勤めるかたわら、著作も発表するようになった。その後熊本の第五高等学校教授、東京師範学校教授、二松学舎学長を経て、昭和四年（一九二九）まで京城（ソウル）大学文学部教授を務める。[6]

〔内容〕『支那文学史』は、同文社発行『支那文学』第一号から九号および第十一号に掲載された。『支那文学』は、明治二十四年（一八九一）、児島が大学で同期であった島田鈞一とともに発行したもので、当時多く見られた講義録風の体裁をなすものである。

十一号まで掲載された内容は、「上古史」として周末までの文学を論じている。総論には、清代までの概観が示されており、当初は恐らく清代までの文学を記述する予定だったものと思われる。儒家や道家などの思想を取り扱っており、この著でさす「文学」とは、1・1末松の著と同じく、学術史的な意味である。

2‐2　児島献吉郎『文学小史』（漢文書院、明治二十七年、一八九四）

〔内容〕漢文書院発行『支那学』第一号、第二号、第六号掲載。

春秋戦国までを記す。（未見、「日本で刊行された中国文学史」所載目次による）

2‐3　児島献吉郎『支那大文学史古代篇』（冨山房、明治四十二年、一九〇九）

〔内容〕上古より清末に至るまで九期に時代区分し、さらに第六期、魏晋以後隋の滅亡までを古代、以後を近世と二大別し、隋末までを記す。2‐1、2‐2が春秋末までで終わっており、ほとんど現代的な意味での文学に関する記述がないのに対し、この書では、漢代以降は詩文中心に記されている。小説に関する記述はない。

2‐4　児島献吉郎『支那文学史綱』（冨山房、明治四十五年、一九一二）

〔内容〕上古文学、中古文学、近古文学、近世文学の四時期に時代を区分する。第四篇「近古文学」（近古は唐初から明末を指す）第三十一章に「小説戯曲の勃興」、及び第五篇「近世文学」（近世は清を指す）第八章に「小説戯曲」の項を設ける。

「小説戯曲の勃興」においては、小説戯曲の勃興は本格的には元代にはじまるとし、「水滸伝」「三国志」「西廂記」などについて簡略に記すとともに、「元以前に小説戯曲なきに非ずや」として、主に『漢書』「芸文志」の記述に基づきながら、小説家のはじまりが古代の稗官にあることなどを述べている。

2‐5　児島献吉郎『支那文学史』（早稲田大学出版部、刊行年不明、大正十年（一九二一）以降か？）

〔内容〕著者名に「文学博士　児島献吉郎博士口述」とある。児島が博士となったのは、一九二一年以降であり、その後に出版されたものと思われる。早稲田大学における講義録である。時代区分などは、2‐4と同じである。第四篇「近古文学」第二十六章「戯曲小説」及び第五篇第七章「清の戯曲小説」がある。前者においては、2‐4と同じく小説の起源について述べられており、内容もほぼ同じである。

3‐1　古城貞吉『支那文学史　完』（経済雑誌社、明治三十年、一八九七）

〔著者略歴〕慶応二年―昭和二十四年（一八六六―一九四九）。熊本高等中学（後の第五高等学校）卒業後、明治十七年（一八八四）第一高等学校入学、翌年中退。以後独学で中国の文学、経学を学ぶ。明治三十年『支那文学史』を著し、同年日報社に入社、清国に留学。明治三十九年（一九〇六）東洋大学教授、大正十二年には大東文化学院（後の大東文化大学）教授となる。(7)

〔内容〕序論および全九篇からなる。ほぼ王朝ごとに篇をたて、上古より清代まで詩文を中心として記されている。児島2‐1、2‐2は書かれた時期は、古城の書に先んじるが、春秋戦国までで記述は終わっており、本格的な文学通史としては、古城の書は最も早いものといえる。

この書は、以後版元を冨山房に変え、明治三十五年（一九〇二）訂正再版され以後、訂正増補四版（明治三十九年、一九〇六）、五版（明治三十九年、一九〇六）と版を重ねた。初版においては、小説戯曲に関する記述はなかったが、再版の際に「余論」が付け加えられ、そのうち「儒教主義と小説との関係」、「元曲の発達」、「士君子の小説観」などにおいて小説戯曲について言及している。儒教主義は治国平天下を第一としたため、小説のようなものは退けられるに至ったが、『漢書』「芸文志」に小説家の書が記されていたことなど、宋代に白話小説が作られるま

えに、その前史があったことを指摘する。しかし余論においても十分に小説戯曲について述べられているとはいえず、自ら「再版例言」において「唐宋の仏教文学、金元間の詞曲小説等に関しては、猶未た其消息を悉さゝるもの多し、現に多少の材料を有し、又聊所見なきにあらざるも、今版に於ては未た此に及ふと能はす、姑らく之を異日に譲れり」と記している。

吉川幸次郎は、この書について「明治二十四年に稿を起こし、二十九年に成ったものであるが、これこそ中国文学研究に一転機を画した業績である――（中略）――中国文学を歴史的に系統づける仕事は、実にこの書に始まる。しかもそれは、Giles.Grubeら西洋人による中国文学史にも先行して、世界最初のものであるのみならず、今日においてもなおこれだけの業績は少ない」、またさらに「ただしこの書は大部分を詩文に関する叙述に費し、戯曲小説についての叙述を欠く。またその古代の部分において、経子の書の思想の説明に深入りしすぎているなど、今日の文学史の体裁と同じでない」と評している。[8]

4‐1　藤田豊八『支那文学史』（東京専門学校、明治二十八年―明治三十年?、一八九五―一八九七?）

〔著者略歴〕明治二年―昭和四年（一八六九―一九二九）。号は剣峯。明治二十五年（一八九二）第三高等中学校卒業後、東京帝国大学文科大学漢文科に入学。明治二十八年（一八九五）卒業し、さらに大学院に入り、支那哲学を専攻する。この間、それぞれ早稲田大学及び東洋大学の前身である東京専門学校や東洋哲学館などにおいて講師を務める。明治三十年（一八九七）清国に渡り、羅振玉の『農学報』の翻訳者となる。翌年羅振玉らが、上海に東文学社を設立するに至り、藤田も日本語などを教授した。学生の中には王国維がおり、以後羅、王は藤田を通して、内藤湖南、狩野直喜など日本を代表する中国研究者と交流するようになる。以後大正の初めまで何度か清国、民国

に赴く。大正十二年（一九二三）早稲田大学教授、同十五年（一九二六年）には東京帝国大学文学部教授、昭和三年（一九二八）台北帝国大学文政学部長に就任[9]。

〔内容〕『支那文学史』は、現在国会図書館の蔵書目録には「邦語文学第一回二年級講義録、第二回三年級講義録」と書かれている。刊行年については不明であるが、東京専門学校の講義録が明治二十八年にはじまっており、また講義録の末尾に「講者支那行の事あり、遺憾ながらここにこの稿を中止す」とあり、藤田の渡清が明治三十年であることから、この間に書かれたものと思われる。『支那文学史』とは銘打っているが、古代より東漢までの文学でその記述は終わっている。小説に関しては、「第二期　中世文学　其二　東漢文学　　其四　小説の萌芽」という項目が立てられている。『漢書』「芸文志」に著録される「小説」とは「今の所謂小説と相同じきものにはあらず」とした上で、同書所収の十五種の「小説」の名をあげている。また『荘子』や『楚辞』など南方の文学に神話的なものあるいは恋愛的な要素があり、ここに「novel」という意味での中国における「小説」の萌芽があることを指摘している。

4‐2　藤田豊八『支那文学学史綱　先秦文学』（東華堂、明治三十年、一八九七）

〔内容〕4‐1とほぼ内容は重なる。「序論」において、「蓋し時は歴史の経なり、外囲は歴史の緯なり、人間の特性は此経緯に縁りて一種の歴史的現象を織り出すものなり。文学の史に於いても亦た然らざる可らず」として、文学史を構想するには「時と外囲と人」を観察することが必要であると説いている。この理論に基づき、とりわけ中国における北方と南方の文化的な差異に注目する。範囲は先秦に限られているので、4‐1にあったような「小説の萌芽」についてまとまって論じた部分はないが、南方では想像力に富んだ『荘子』や『楚辞』などが、後に小説

を生みだす基となったという説は同じである。

5‐1　笹川臨風・白河鯉洋・大町桂月・藤田剣峯・田岡嶺雲『支那文学大綱』（大日本図書株式会社、明治三十―三十七年、一八九七―一九〇四）

〔著者略歴[10]〕（笹川、藤田についてはそれぞれ6‐1、4‐1の記述を参照。）

白河鯉洋（明治七年―大正八年、一八七四―一九一九）本名次郎。鯉洋は号。明治三十年（一八九七）帝国大学文科大学漢学科卒。大学の仲間である田岡嶺雲や藤田豊八と『江湖評論』を発刊、自らも多くの文を寄せる。のち神戸新聞、九州日報の主筆となる。さらに張之洞に招聘され、南京にわたり、江南高等学堂の総教習となった。帰朝後は、早稲田大学講師、大阪関西日報の主筆となり、大正六年（一九一七）大阪市より衆議院議員に選出されるが、同八年帝国議会の開院後、大町桂月と会飲したのち、急死する。

大町桂月[11]（明治二年―大正十四年、一八六九―一九二五）本名芳衛。桂月は号。幼い頃はいくつかの学校、私塾で漢文を学び、その後第一高等学校を経て、明治二十六年（一八九三）東京帝国大学国文科に入学。同二十八年（一八九五）、東大から『帝国文学』が発刊されると、桂月は編集委員の一人として、同誌に多くの文章を発表した。同二十九年（一八九六）、大学を卒業後は、文筆や雑誌を主宰するなどした。文を以て名を知られ、高山樗牛と並び称されるほどであった。

田岡嶺雲[12]（明治三年―大正元年、一八七〇―一九一二）本名佐代治。嶺雲は号。土佐の出身で、板垣退助らが設立した立志社によって設立された共立学校で英語を学ぶと共に、独学で漢文を学ぶ。後、大阪の官立中学校（後の第三高等学校）に学ぶが、病気のため退学、明治二十一年（一八八八）に上京し、水産伝習所に入り、同二十四年

（一八九一）に卒業し、東京帝国大学文科大学漢学科の選科に入った。正規の教育を受けていなかったために、本科には入ることができなかった。同二十七年（一八九四）卒業。『東亜説林』、『青年文』などの雑誌を発行したが、いづれも長くは続かなかった。しかしそれらに発表した評論や論説を『嶺雲搖曳』（明治二十八年）として発行するや青年を中心に熱狂的な歓迎を受けた。その後中学校教師、新聞記者を経て、同三十二年（一八九九）張之洞、藤田豊八の招きで上海に渡り、羅振玉の主催する学校で日本語を教えるが、病のため帰国。同三十四年（一九〇一）、教科書会社と学校の癒着が全国的に問題となり、これを批判する文章を連日新聞に発表したことで、官吏侮辱罪に問われ、禁固刑に処せられる。以後嶺雲の著作は幾度か発売禁止処分を受けた。同三十八年（一九〇五）再び大陸に渡るがほどなくして脊椎カリエスを患い帰国。以後は病のために歩行も困難となるが、精力的に執筆活動を続け、没後の五日前には、自叙伝「数奇伝」を著した。

〔内容〕上記に記した東京帝国大学文科大学を卒業したての新進気鋭の同窓生五人の合著による叢書で、明治三十年（一八九七）八月より毎月一冊、全十六冊の刊行が計画された。この叢書刊行の直前には、同じく大日本図書株式会社から『国文学大綱』が発行されていた。これは東京帝国大学文科大学国文科卒行の塩井雨江、大町桂月、武島羽衣の三名によって企画されたものであった。国文学上の各時代を代表する作家を取り上げ、一人一冊、計十二冊の出版を計画していたが、実際には三巻しか出版されなかった。『支那文学大綱』は、この姉妹編とも言えるもので、『国文学大綱』の方法を踏襲し、ほぼ一冊につき一人の作家を取り上げその評伝を中心に、時代背景、作品の鑑賞を試みたものであった。これは『国文学大綱』「序」によれば、モーレー『英国文人叢伝』やロバートソン『文豪列伝』を参考にしたものであるという。

『支那文学大綱』は実際には十五冊しか出版されなかったようである。[13]『白楽天』『杜甫』など有名な詩人から、

『元遺山』『曹子建』など、おそらく日本において初めてのまとまった評伝が書かれた詩人、あるいは『李笠翁』『湯臨川』などの戯曲家も含まれている。[14]『李笠翁』『湯臨川』は、6‐1でふれる単著としては日本ではじめて小説戯曲の歴史を記した『支那小説戯曲小史』を書いた笹川種郎によるものである。これらの本の出版時期はほぼ重なっており、内容も重複している。

6‐1　笹川種郎『支那小説戯曲小史』（東華堂、明治三十年、一八九七）

〔著者略歴〕（明治三年―昭和二十四年、一八七〇―一九四九）号は臨風。第三高等中学文科を経て、明治二十九年（一八九六）東京帝国大学文科大学国史科を卒業。その後は大学の同窓らと『東亜説林』、『江湖文学』、『帝国文学』などの雑誌の発行に参加する。以後も活発な文筆活動を行うとともに、教職などにもついた。もともと国史学専攻であったため、日本文化史にかかわる著作が多い。大正十三年（一九二四）には、「東山時代の文化」で文学博士の学位を得る。

〔内容〕『支那小説戯曲小史』は単著としては日本ではじめての中国の小説戯曲に関する専著である。内容は以下の目次の通りである。[15]

第一篇　支那に於ける小説戯曲の発展
第二篇　元朝　第一章　概説　第二章　雑劇　第三章　『水滸伝』及『三国志』　第四章　『西廂記』
第五章　『琵琶記』
第三篇　明朝　第一章　概説　第二章　『西遊記』　第三章　湯若士
第四篇　清朝　第一章　概説　第二章　『紅楼夢』　第三章　金聖歎　第四章　李笠翁　第五章　『桃花扇』

附録　『金雲翹伝』

第二篇第四章『西廂記』および第四篇第三章「金聖歎」については、明治二十九年（一八九六）、雑誌『帝国文学』第二巻に発表した「西廂記を読む」（第二巻第九号、第十号）及び「金聖歎」（第二巻第三号、第四号）に全面的によっている。また第三篇第三章「湯若士」及び第四篇第四章「李笠翁」は、5‐1『支那文学大綱』の笹川が担当した「湯若士」（巻五、明治三十一年発行）及び「李笠翁」（巻三、明治三十年発行）とほぼ同時期に書かれていたものと思われ、内容はほぼ同じである。

冒頭に「著者曰く」として「吾が学の浅くして識の狭き、未だ洽く支那の小説と戯曲とを窺ひ知り得たるに非ず。其の名を聞て未だ見ざるの書あり」と笹川自身が述べているように、中国小説に対して必ずしも詳しい知識があったわけでない。また目次にも見られるように、元以前に関しては、「第一篇　支那に於ける小説戯曲の発展」でまとめられているのみである。それによれば、中国には実質的であることを重んじる儒教を中心の思想として据える北方の文化と豊かな想像力を有する南方の文化という大きな二つの傾向を有する文化があるが、主流は北方にあったとする。さらに南方では『荘子』や『楚辞』などが書かれ、それらは中国文化の主流となることはなかったが、中国小説の起源として注意すべきものであると指摘している。唐以前の小説については、具体的には『穆天子伝』『飛燕外伝』『雑事秘辛』『搜神記』『続斉諧記』『開元天宝遺事』『会真記』『遊仙窟』などについて触れているが、いずれも簡単な記述で終わっており、書名をあげただけのものもある。

6‐2　笹川種郎『支那文学史』（博文館「帝国百科全書」第九編、明治三十一年、一八九八）

〔内容〕博文館は明治二十年（一八八七）創業の出版社であり、雑誌『太陽』を創刊するなど明治の言論界におい

て、重要な役割を果たしていた。「帝国百科全書」全二百巻（一八九八―一九〇九）は、英国の大英百科全書に範をとったもので、明治三十一年に刊行がはじまり、文学、歴史、哲学等のみならず、経済、農業、化学など様々な分野の内容を持つ。『支那文学史』は、古代より清朝までの文学史を記述する。総説において中国文化における南北の差異にふれるなど、5・1、6・1の内容を踏襲している。小説については「第七期　金元の文学　二　小説と戯曲の発展」に至りふれており、まず「小説戯曲発達遅々の所因」が述べられているが、それも6・1と同じものであり、北方の儒教文化優位の中で、元という異民族の王朝が出現したことによって、新しい戯曲というジャンルが成立したと指摘する。

7・1　高瀬武次郎『支那文学史』（明治三十四年、一九〇一）

〔著者略歴〕明治元年―昭和二十五年（一九六八―一九五〇）。明治三十一年（一八九八）東京帝国大学文科大学漢学科卒。哲学館（東洋大学の前身）を経て、明治四十年（一九〇七）京都帝国大学文科大学哲学科助教授となる。京都大学におけるはじめての中国哲学の専任教官となる。のち立命館大学文学部長などを務める。

〔内容〕国会図書館の目録には、「哲学館漢学専修漢学講義」との記述がある。哲学館とは東洋大学の前身である。哲学館では明治三十年（一八九七）より、遠隔地に住む生徒のために、通信教育を行っており、「漢学専修科講義録」として講義録を編集、発行していた。同書はその中の一冊である。総論十一章、本論は「上古期」（戦国末まで）十三章、及び「支那中世期文学」十二章からなり、隋まで記述されている。小説に関しては、「第二篇支那中世期文学　第一期　秦漢文学　秦漢文学の結論　（天）漢代の小説」及び「第二期　三国六朝文学結論」に見られる。漢代の小説については、『漢書』「芸文志」の「小説」について簡単にふれている。また三国及び六朝について

の小説については、この時代には、五行、讖緯思想が盛んとなり、神仙等の怪異譚がはやったことさらに仏教が伝来し教理を伝えるためにさらに怪異の書が多く書かれたと指摘している。この後には「三教の関係」という一節も見られ、他の文学史には見られない哲学者である高瀬の特色が出ている。

8‐1　中根淑『支那文学史要　全』（金港堂、明治三十三年、一九〇〇）

〔著者略歴〕天保十年―大正二年（一八三九―一九一三）。号は香亭。幕臣の漢学者、曽根得斉の子として生まれ、幼いころ中根家の養子となる。明治維新の際には最後まで幕府方についた。徳川慶喜が駿河に移るに従い、沼津兵学校教授となる。以後文部省編輯官などを務めた後、文筆活動に入る。

〔内容〕太古より清まで記述する。例言によれば、古城貞吉の書を意識して書かれたものである。小説については、元代の記述で戯曲についての記述の前に、ごく簡単に宋以前の小説について、『穆天子伝』、『漢武帝内伝』、『会真記』、『遊仙窟』の書名をあげるのみである。

9‐1　久保天随『支那文学史』（人文社、明治三十六年、一九〇三）

〔著者略歴〕明治八年―昭和九年（一八七五―一九三四）。本名得二。字は士奇。別号は黙龍・青琴など。第二高等学校を卒業後、明治二十九年（一八九六）東京帝国大学文科大学漢文学科入学、同三十二年卒業、大学院に入る。在学中から『帝国文学』に文章を発表し、卒業後も文筆中心の生活を続け、多くの著作を著した。以後宮内省図書寮編修官を経て、昭和四年（一九二九）台北帝国大学の文政学部東洋文学科の教授となる。宮内省に職を得てからは、研究生活に入り、昭和二年（一九二七）には「西廂記の研究」によって東京帝国大学より博士学位を授与され

ている。

〔内容〕冒頭におかれた「例言十則」によれば、この書は久保が大日本文学会の依頼に応じ、講義録「文学講義」上に掲載したものを出版したものであるという。この他にも、久保は大学在学中の明治三十年（一八九七）から、『帝国文学』に中国文学に関する論文等を発表し続けており、講義録を書くにあたってそれらも参考にしたものと思われる。全十二講からなる。また例言第五則には、「支那の小説戯曲は、従来非常に軽蔑されて、その価値を認めるものさへ無いという有様、それ故に出来得る限り、意を用ひました。謂はば、闡幽顕微の微志であります。しかし、自分でまだ読まぬものも、多くありますが、それ等は、最も信ずべき、前賢及び先輩の説に従ふことにしました」と書かれている。宋以前の小説については、第五講「両漢文学」、第八講「唐代文学」においては、「杜子春」や「長恨歌伝」などいくつかの作品名をあげるとともに、中でも「会真記」「遊仙窟」が名編であるとしている。これらの記述は、森槐南の講義録などを参考にして書かれたのではないかと思われる。

9‐2　久保天随『支那文学史』（早稲田大学出版部、明治三十七年、一九〇四）

〔内容〕早稲田大学の講義録として執筆したものである。この著は修訂増補を重ね出版されている。国会図書館に所蔵されるものが、この明治三十七年度版であるが、芳村弘道の指摘によれば、これもすでに改定を経たものであり、黄得時「久保天随博士小伝」によれば、明治三十四年（一九〇一）年ころに、すでに早稲田大学の講義録を書いていたという。その後明治四十年（一九〇七）、明治四十三年（一九一〇）にも再度出版されているが、いずれも上下巻となっており、小説、戯曲を中心に大きな増補が見られる。明治三十七年度版では、唐代の小説についてはまったく触れられていなかったが、明治四十年度版では、「第3期　中世文学　第1唐代文学　26唐代の小説」

という項目がたてられている。しかしいくつかの名篇の名前をあげるにとどまっており内容は乏しい。一方明治三十七年度版からある「第二期　中古文学　（七）小説の発展」においては、『漢書』「芸文志」の「小説家」について分析するとともに、胡応麟の説を紹介し、「飛燕外伝」、「雑事秘辛」については詳しい紹介を試みている。

また明治四十年度版、四十三年度版では、「清代文学」において「近時の小説」の項を設け、「児女英雄伝」など清末の作品にまで触れている。

10・1　松平康国『支那文学史談』（早稲田大学出版部、出版年不明）

〔著者略歴〕文久三年―昭和二十一年（一八六三―一九四六）。東京大学予備門において英語を学び、明治一九年（一八八六）ミシガン大学に留学。帰国後は、読売新聞記者となり、また袁世凱に招かれ中国にわたる。明治三十九年（一九〇六）には張之洞の政治顧問となる。明治四十一年（一九〇八）早稲田大学教授となる。

〔内容〕宋代までを記す。「緒言」において、従来の古城、久保、笹川の文学史が、漢学の素養のあるものには、レベルが低く、無いものには高いものであるとの認識から、読者を漢学の素養のないものに設定し記述すると述べている。総説においては、中国文化の特徴について「雄大」「悲壮」「純一」「簡潔」「対待」などのキーワードで説明し、文字の種類、文体の種類などもわかりやすく分類し説明している。小説に関する記述はない。

11・1　宮崎繁吉『支那近世文学史』（早稲田大学出版部、明治三十八年、一九〇五）

〔著者略歴〕明治四年―昭和八年（一八七一―一九三三）。号は来城。佐賀中学を卒業後は、上京し独学。二六新聞に入り、日露戦争の際には従軍記者となる。また明治四十一年（一九〇八）頃には、満州日報記者として清に駐在

したこともある。後には福岡高等学校等でも教鞭をとる。台湾や大陸に渡り当地の人と交流した。[16]

〔内容〕明治三十七年度文学教育科第一学年講義録である。表題の通り、近世すなわち金元以降の文学について述べたものであるが、第一篇「金元間の文学」第四章「元朝の小説及び戯曲」第一節「小説及び戯曲の発展」において、元以前の小説及び戯曲についてふれている。中国における南北文化の地域差を述べ、南の文化においては小説的な萌芽があったにもかかわらず、儒教を重んじる北の文化に圧倒され、それは育たなかったこと、また元代に至って異民族の到来とともに、それまで曲が盛んに作られるようなったという他書にも見られる説明がなされている。また漢代の小説、六朝、唐代の小説についても、他書に見られる記述とほぼ変わりはない。

清代末の小説も紹介し、とりわけ『紅楼夢』と『児女英雄伝』などを比較したところに特色がみられる。

別表　明治期日本における中国文学史

	著者・生没年	経歴	著作	出版社・出版年	備考
1—1	末松謙澄 安政二年—大正九年、一八五五—一九二〇	ケンブリッジ大学卒	『支那古文学略史』	文学社、明治十五年、一八八二	明治十五年、六月、ロンドン日本学生会における講演にもとづく
2—1	児島献吉郎 慶応二年—昭和六年、一八六六—一九三一	明治二十一年（一八八八）、東京帝国大学付属古典講習科漢書科卒	『支那文学史』	同文社、明治二十四—二十五年、一八九一—一八九二	同文社発行『支那文学』第一号から九号および第十一号に掲載
2—2	児島献吉郎		『文学小史』	漢文書院、明治二十七年、一八九四	漢文書院発行『支那学』第一号、第二号、第六号掲載。
2—3	児島献吉郎		『支那大文学史古代篇』	冨山房、明治四十二年、一九〇九	

	著者・生没年	経歴	著作	出版社・出版年	備考
2—4	児島献吉郎		『支那文学史綱』	冨山房、明治四十五年、一九一二	
2—5	児島献吉郎		『支那文学史』	早稲田大学出版部、刊行年不明、大正十年、一九二一以降か？	
3—1	古城貞吉 慶応二年—昭和二十四年、一八六六—一九四九	第一高等学校中退	『支那文学史　完』	経済雑誌社、明治三十年、一八九七	
4—1	藤田豊八 明治二年—昭和四年、一八六九—一九二九	明治二十八（一八九五）東京帝国大学文科大学漢文科卒業	『支那文学史』	東京専門学校、明治二十八—明治三十年？一八九五—一八九七？	邦語文学科第一回二年級講義録、第二回三年級講義録
4—2	藤田豊八		『支那文学学史綱 先秦文学』	東華堂、明治三十年、一八九七	
5—1	笹川臨風・白河鯉洋・大町桂月・藤田剣峯・田岡嶺雲	欄外参照。	『支那文学大綱』	大日本図書株式会社、明治三十—三十七年、一八九七—一九〇四	白河、大町、田岡の生没年等については、欄外を参照のこと。
6—1	笹川種郎 明治三年—昭和二十四年、一八七〇—一九四九	明治二十九年（一八九六）東京帝国大学文科大学国史科卒	『支那小説戯曲小史』	東華堂、明治三十年、一八九七	
6—2	笹川種郎		『支那文学史』	博文館「帝国百科全書」第九編、明治三十一年、一八九八	
7—1	高瀬武次郎 明治元年—昭和二十五年、一九六八—一九五〇	明治三十一年（一八九八）東京帝国大学文科大学漢学科卒	『支那文学史』	哲学館 明治三十四年、一九〇一	哲学館漢学専修漢学講義

	著者・生没年	経歴	著作	出版社・出版年	備考
8—1	中根淑 天保十年—大正二年（一八三九—一九一三）	幕臣の漢学者、曽根得斎の子として生まれ、幼いころ中根家の養子となる。	『支那文学史要　全』	金港堂、明治三十三年、一九〇〇	
9—1	久保天随 明治八年—昭和九年（一八七五—一九三四）	明治三十二年（一八九八）東京帝国大学文科大学漢文学科卒	『支那文学史』	人文社、明治三十六年、一九〇三	
9—2	久保天随		『支那文学史』	早稲田大学出版部、明治三十七年、一九〇四	早稲田大学講義録
10—1	松平康国 文久三年—昭和二十一年（一八六三—一九四六）	明治一九年（一八八六）年ミシガン大学に留学	『支那文学史談』	早稲田大学出版部、出版年不明	早稲田大学講義録
11—1	宮崎繁吉 明治四年—昭和八年（一八七一—一九三三）	佐賀中学を卒業後は、上京し独学	『支那近世文学史』	早稲田大学出版部、明治三十八年、一九〇五	早稲田大学明治三十七年度文学教育科第一学年講義録

白河鯉洋（明治七年—大正八年、一八七四—一九一九）。明治三十年（一八九七）東京帝国大学文科大学漢学科卒。
大町桂月（明治二年—大正十四年、一八六九—一九二五）。明治二十九年（一八九六）東京帝国大学文科大学国文科卒。
田岡嶺雲（明治三年—大正元年、一八七〇—一九一二）。明治二十七年（一八九四）東京帝国大学文科大学漢学科選科卒。

三　記述の特徴

以上明治三十年代から四十年代にかけて書かれた中国文学史、中国小説史について、小説、とくに宋以前の小説

についてどのような記述がされているかを中心に概観した。以下その特色について考えてみたいと思う。

まず前稿においても簡単にふれたが、本格的な内容を持つ初めての中国文学史といわれる3‐1古城貞吉の『支那文学史　完』では、小説について触れられていない。出版は明治三十年（一八九七）であるが、古城は明治二十四年（一八九一）から、執筆に着手していたようである。これはすでに触れたように前年の明治二十三（一八九〇）には三上参次、高津鍬太郎によって初めての日本文学史である『日本文学史』（金港堂）が出版されたことに触発されて執筆を思い至ったものと思われる。古城の書には、井上哲次郎による「序」が付されており、そこには「近頃日本文学史を著はすものは二三之れあり、然れども未だ支那文学史を著はししものあるを聞かず」とあり、しかし中国学術界にはいまだその準備はなく、そこで中国文化から大きな影響を受けてきた日本人こそがこの任に当たるべきであると書かかれている。これは古城自身の執筆動機を代弁したものといえるだろう。

当時はフランスのイポリット・テーヌの書いた『英国文学史』が非常に大きな影響力を持っており、三上達は、こうした西洋の文学史を手本に日本文学史を書き上げた。テーヌの文学史は、「種族、環境、時代」がそれぞれの国の文学の在り方を決めるという考えで書かれており、古城もこれらの書を参考にその著を書き上げたものと思われる。「序論」においては、中国人の国民性や地理的特徴として西北と東南によってその文学に違いがあることなどを指摘している。例えば、

> 四囲の境遇、山川風土の形勢、人俗好尚の異同等よりして一団の影子を造成して其の文学上に照映するものあり（中略）西北の人は直を以て聞こゆれとも其の失や狠なり東南の人は詐、多きも其の得や易なり故に古より以来、西北の政は多く厳を以て平を致し江南の政は多く寛を以て治を為せり（中略）是の如くにして其の文学

上に影響する所、西北は詞気貞剛にして音韻鏗爾たり而して東南の文学は雍容和雅、済々たる治平の音、毎に此地より発す

とある。内容は、先秦時代は「諸子時代」として、儒家、道家などを扱っているが、漢代以降は詩文を中心に論じている。しかし先に引用にした吉川幸次郎の「この書は大部分を詩文に関する叙述に費し、戯曲小説についての叙述を欠く」という指摘にもあるように、この書では小説、戯曲が取り扱われていない。この点は執筆当時においてもすでに指摘されており、『東洋哲学』第四編第六号（明治三十年八月）の「新刊批評」において「先秦文学と支那文学史」として、藤田豊八の書とともに批評された文章において「稗史小説を全く省略したるは吾人の大に遺憾とする所也、後代支那文学史中、稗史小説は少からさる好位置を占むるとは作者の夙に知る所ならん、然るに作者は全然措きて問はす、果して意ありて然りしか、又意なくして然りしか、将た所謂経術文章の外、一も取るべからずとの見解より之を捨てしか」と指摘されている。このことについて古城自身も気にかけ、再版の際に補足の説明を行ったこともすでに記した通りである。また「先学を語る—古城貞吉先生」によれば、古城がこの書を書いた当時は、小説戯曲などを正当な文学と認められておらず、そのため古城は小説戯曲に関する記述は行わなかったが、その後その方面での研究が出てきたので、この書の内容を不完全なものとし、後には絶版にしたという逸話が紹介されている。あるいは後年古城自身は、『元曲選』などを観たが、学力不足のため理解できず、省略したのであり、そのため支那に行って勉強したいと思ったと述懐している。しかし一方で、古城は若い頃に『金瓶梅』を借りてきて読んでいたところ、父親に見つかり怒られたというエピソードなどもあり、その発言の真偽のほどは測りかねるところもある。[17]

古城の発言は、出版後かなり時を経ていたり、弟子たちが伝え聞いたものであることを考慮に入れなければならないが、むしろこうした発言が出てくる背景には、古城が初版を出版した明治三十年には、小説を文学史に組み込むことは難しかったが、再版を出す明治三十五年には、文学史の中には小説を含まなければならないという考え方が定着したと考えられることはできないだろうか。

古城以外の小説に関する記述のある文学史の内容は、以下の三点にまとめることができる。

一．元代以前は、戯曲小説がほとんど発達しなかったことを述べ、その理由として中国の南北文化の差異をあげる。南方には『荘子』『楚辞』など想像力に満ちたものが書かれていたが、儒教に代表されるような北方の実際的で規範や道徳を重んじる文化が優勢を占めていたために、小説への萌芽を含みながらも、十分には発達しなかったと説く。

二．漢代については『漢書』「芸文志」の「小説家」についてふれ、「小説家」の起源について述べる。

三．漢魏、六朝、唐代について上記にふれたような代表的な作品をあげる。

一については、すでにふれたように、当時はフランスのイポリット・テーヌの書いた『英国文学史』が非常に大きな影響力を持っていたことと関係がある。

テーヌの文学史は、「時代、環境、種族」がそれぞれの国の文学の在り方を決めるという考えで書かれており、中国小説の形成にも、この考えは大きな影響を与えていた。

例えば藤田豊八は、4‐1『支那文学史』においては「小説の萌芽」という一節が設け、そこでは小説の源流は、想像力の豊かな南方に現れたと説明している。

由来南人は空想の力に富む。而して神仙方術家者流は南方老荘の思想に附会し、その寓言を事実として人間長生不死の欲望に投せしものにあらずや。支那小説はここに起因を有せしなり。

さらに、

南方文学が北方文学の意志と情との衝突を写すのみなるに異なりて、天然の美を発揮せしはやがて放埒なる情欲を写し、はた人間肉体の美を描くに至りし所以にあらずや。

と指摘する。そして「余は志怪、伝奇の共に南方文学に胚胎せしものなるを断言し得べしと信ず」と結論付ける。しかし『支那文学史』は、六朝までで記述が終わっているので、六朝から唐にかけての小説の変化については、藤田は触れていない[18]。

また初めての中国小説史の専著である笹川種郎の『支那小説戯曲小史』においては、この藤田の北方文学、南方文学という考え方を引き継ぎ、南方に小説の萌芽があるとした上で、

然れども北方は支那上代に於ける歴史的中心なり。実際的傾向を有する北方人種は上代支那の歴史的人種なり。南方人種は永く歴史的中心の圏子裏に入ることを得ざりき。されば北方人種思想の風潮は殆ど支那全土を傾倒せんとし、其産物なる儒教は古今三千載を貫きて禹域の人心を繫縛せり。南方文学が豊富なる思想を有するにかかはらず、終に小説戯曲の発達を来さざりしもの亦北方思潮に傾倒せられしか故に非ざるなきか。(『支那小

説戯曲小史』第一篇「支那に於ける小説戯曲の発展」）

とし、元代以前に小説戯曲が発展しなかった理由とし、いくつかの作品を紹介する。そして元に至り、異民族王朝になったことにより、従来の価値観にとらわれず、戯曲や小説が発達したと説く。

一方で、藤田、笹川の書を含め、今回調査した文学史の宋以前の小説に関する記述は、上に指摘したような二や三の内容にとどまっている。またそもそも笹川の『中国小説戯曲小史』も、出版当時において、必ずしも高い評価を得ていたわけではなかった。桂浜月下漁郎（大町桂月）「先秦文学と支那小説戯曲小史とを評す」（『帝国文学』第三巻第七号、明治三十年所収）には以下のように記されている。

支那小説戯曲小史を著はすに当たりては、漫筆的に傾き、漫評に流れ、支那人の文話詩話に類して、科学的、秩序的、総合的、もしくは批評的なるを力めざりしを惜しまずんばあらず。この書、支那小説戯曲小史と云はんよりは、支那小説戯曲名作梗概といふを適当とす、極言すれば、水滸伝、西遊記の二書の略評と、西廂記、琵琶記、紅楼夢、桃花扇、金雲翹伝の四書の梗概、湯若士、金聖歎、李笠翁の三人の略伝とを、稍順序よく臚列して、強ひて一冊子となせるもの也。論じて要領を得ず、説いて肯綮に中らず、筆致も雑誌的にして、書冊的の威厳なく縦横流活の妙なく、老成慎重の趣なく、半可通の惚気に似て、将軍鞍に拠りて顧盻するの風度なく、華麗なるか如くにして、実は渋晦、器用なるが如くにして、実は幼遅、一言すれば、高等中学時代もしくは中学時代の習気を存するもの多し。

笹川の著が、全般的にいくつかの中国小説の紹介に終わっており、しかもその紹介の多くも金聖歎の説によるのみで、系統だった小説史を築くことができなかった点が批判されている。

ところで、和田英信は「明治期刊行の中国文学史」において、当時の文学史の著者の多くが現在の東京大学前身にあたる帝国大学文科大学古典講習科もしくは漢学科の卒業生であったことを指摘している。[19]

本稿でも上記の調査結果に記したように、児島献吉郎、藤田豊八、笹川種郎、白河次郎、大町桂月、田岡嶺雲、高瀬武次郎、久保天随など筆者の多くは、明治二十から三十年代に帝国大学文科大学の古典講習科もしくは漢学科を卒業していた。彼らは卒業後、『東亜説林』や『帝国文学』などの雑誌を主宰し、文筆活動を行い、いわゆる「赤門文士」と呼ばれていた。[20]

明治二十年頃までの極端な欧化政策に反するように、東京帝国大学には古典講習科（明治十四年から明治二十一年）や文科大学漢文学科（明治十九年創設）が置かれ、多くの優秀な卒業生を輩出することとなった。彼等は漢学を専攻するとともに、西洋の新しい学問も学んでおり、そうした彼らにとって、明治以前の旧来の伝統を守り続けることに熱心な漢学者達の学問方法は納得できるものではなかった。そこで卒業後は、大学にとどまらず、東亜学院などの学校経営を試みたり、『東亜説林』などの雑誌を主宰し、彼ら自身も進んで文筆活動を行った。そのような状況について、当時『東洋哲学』第四編第四号（明治三十年六月）の「雑報」に載せられた「漢学研究の方法」は以下のように伝えている。漢学研究において新しい研究が開拓されないのは、

当今の所謂漢学者概して明治以前の教育を受けたる老朽者にあらざれば、則普通学に乏き固陋なる学者にして、経術文章に長するも、脳中既に陳腐なる知識の為に満され、絶えて進取の気象なく、到底今日の学術界に卓立

して、他の学者と肩を斉うして論争すべきにあらさる也、

という旧来の漢学者の状況があり、一方西欧の学問にも通じさらに漢学に対してもそうした方法を以て研究する者たちがあるが、そうした者達の多くは旧漢学者には後継者とみなされないという。そこで「所謂新漢学者は唯新聞雑誌若くは著述に於て己か研究の結果を世に発表するに過ぎざる」状況にあったという。

まさに藤田、笹川、田岡、白河、久保など上記にあげた中国文学史を著した著者の多くは、東京帝国大学の漢学科を卒業生であり、卒業後は、在野で活躍するものが多かった。その当時について、神田喜一郎は、久保天随について語った文章の中で、「久保天随先生の東京帝国大学を卒業せられた明治三十二年前後には、その卒業生の中にはみずから好んで在野派的な行動をとる人が少なくなかった」とし、久保のほかに、田岡霊運、中野逍遥、藤田剣峰、白河鯉洋などの名を挙げている。[21] 彼らが卒業後、大学に残らなかったのは、上に指摘されているような事情があったものと思われる。

一方東京帝国大学においては、大学に関係ある教員、職員、学士、学生らが帝国文学会を組織し、明治二十八年（一八九五）雑誌『帝国文学』を発刊した。『帝国文学』は必ずしも漢学専門の雑誌ではなく、笹川種郎も発刊当時について「私は其頃藤田（剣峯）藤田（精一）藤岡（作太郎）藤井（乙男）田岡（嶺雲）小柳（司気太）君なんかの一味に依りて作られた東亜説林、東亜学院講義録の方に関係していましたから、初の頃の帝国文学とは縁が薄かったのです[22]」と述べている。しかし役員に大町桂月や狩野直喜が名を連ねるなどしており、そうした関係から次第に、漢学科の卒業生らも同誌に寄稿するようになった。その状況を三浦叶は「『帝国文学』は他の文学雑誌と異なり、一段と深く漢学会に関心を寄せていたようである」とし、同誌と漢文学とのかかわりを考察している。[23]

同誌には、田岡佐代治「漢学復興の機」（第二巻第一号、明治二十四年）や白河次郎「漢学者の新事業」（第三巻第十号、明治三十年）など旧来の漢学がおこなわれている現状を憂え、西洋の方法を取り入れた新しい漢学研究の必要性が説かれた文章が多く発表されている。あるいは「漢学者の渡清」（第三巻第九号、明治三十三年）として、「西洋の漢学者の中には、足直に支那の内地を踏み、耳直に支那の活語を聞き、支那の新作を読み、他国に伝はらざる珍書を得て、活眼を以て、之を研究するもの少なからず」として、日本人学者も直に清を見るべきだとして、藤田や田岡の渡清を歓迎する文章なども書かれている。

当時の中国文学史の著者達は、以上のような問題意識を持って、西洋を起源とする文学史、特にテーヌの『英国文学史』を範として、中国文学史を叙述することに重点をおいていた。それは和田英信が、「草創期の『文学史』においは、その『（中国の）文学』という内容そのものにまして、『史』という著述の枠組みを為す学術体系や叙述スタイルの新らしさということの比重が、相対的に大きかった」[24]と指摘しているように、時として、「文学史」というスタイルが先行してしまう結果にもなってしまった。それは、小説には限らず、例えば、桂浜月下漁郎「先秦文学と支那小説戯曲小史とを評す」においては、笹川の『支那小説戯曲小史』とともに評された藤田豊八（剣峯）の『先秦文学』に関しても、「山川気候は、根本の一因なれども、文学に取りては実は末也、剣峯の地形にのみ重きを置くは、研究の階段を忘れたるものに非ずや。先秦文学は、当時の所謂哲学を経とし、文学を緯として、之に地理的考察を附加して、小冊子の割合にはよく出来たり」と指摘し、藤田の著が、南方、北方の文化の違いに、重点を置きすぎる傾向を批判している。[25]

以上のように、明治三十年から四十年に、日本で書かれた中国文学史の中では、小説について記述することが試みられたものの、元代以降の戯曲や白話を中心とする内容の紹介や感想の域を出ることができず、宋代以前に至っ

ては、ほとんど内容がなかった。その一因には、文学史のスタイルが先行する中で、伝統的な詩文とともに小説をどのように論じていくのか、小説のはじまりをどのように記していくのかという考察が十分でなかったことが考えられる。

四．終わりに

先に引いた「先秦文学と支那小説戯曲小史とを評す」においては、「われは支那文学に於けるテインを以て、藤田剣峯、笹川臨風に期しぬ」とあり、さらに「田中従吾軒、森槐南諸氏、支那の小説戯曲に通ぜるを聞く。而して、支那小説戯曲小史の著は、従吾軒の手に成らず、槐南の手に成らずして、少壮白面の臨風によりて、其端を啓かれたり」と書かれており、『帝国文学』の筆者たちが、田中従吾軒や森槐南を意識していたことがうかがわれる。前稿で筆者が指摘したように、森槐南の小説史研究は、宋代以前の記述において成果があったものの、槐南は、「文学史」というスタイルに関しては無自覚な面があり、小説と詩文、経書などの関係については、考察が進められることはなかった。

大正八年（一九一九）『支那文学概論講話』を発表した塩谷温は、明治三十五年（一九〇三）東京帝国大学文科大学漢学科を卒業している。在学中塩谷が、森槐南の授業を受け、その小説史の構想に大きな影響を受けたことは、前稿でも指摘したが、一方で、塩谷は、以上のような明治期に書かれた文学史、その背景にあった『帝国文学』執筆者達を中心とする新しい漢学の模索にも影響を受けていたものと思われる。そして両者の成果は、塩谷の清国、ドイツ留学を経て、『支那文学概論講話』に結実したものと思われる。

注

（1）「中国小説自来無史、有之、則先見於外国人所作之中国文学史中、而後中国人所作者之中、亦有之、然其量皆不及全書之什一、故于小説仍不詳」。北京大学新潮社。のち、人民文学出版社『魯迅全集』第九巻（一九八一年）所収。引用は『魯迅全集』版による。なお、本稿では、以下書名、引用文などは、全て常用漢字に統一した。

（2）『慶応義塾大学日吉紀要　中国研究』第一号、二〇〇八年所収。

（3）このことについては、川合康三編『中国の文学史観』（汲古書院、二〇〇二年）に詳しい。

（4）日中を中心とした近代以降の中国小説史研究については、黄霖「近百年来「中国小説史」的編纂」（『中国文哲研究通訊』第十五巻 第一期、二〇〇五年）に詳しい。

（5）以下各本の著者の略歴については、特に注記しない限り、三浦叶『明治の漢学』（汲古書院、一九九八年）第二部「漢学者の研究と活動」第五章「明治年間に於ける日本漢学史の研究」及び川合康三編『中国の文学史観』（前掲注3）資料編「日本で刊行された中国文学史―明治から平成まで―」を参考とした。

（6）『明治の漢学』（前掲注5）第二部「漢学者の研究と活動」第二章「児島星江（獻吉郎）とその学問」参照。

（7）「先学を語る―古城貞吉先生―」（原『東方学』第七十一輯、一九八六年所収、後『東方学回想Ⅰ　先学を語る（1）』所収、刀水書房、二〇〇〇年）参照。

（8）吉川幸次郎「中国文学研究史―明治から昭和のはじめまで　前野直彬氏と共に―」（『吉川幸次郎全集』第十七巻、筑摩書房、昭和四十四年所収）。

（9）「先学を語る―藤田豊八先生―」（原『東方学』第六十三輯、一九八二年収載、後『東方学回想Ⅰ　先学を語る（1）』収載、刀水書房、二〇〇〇年）、江上波夫編著『東洋学の系譜』［第二集］所収「藤田豊八」（江上波夫執筆）（原載『月刊しにか』、大修館書店、一九九四年）。

（10）『支那文学大綱』の内容及び執筆者などについては、竹村則行「『支那文学大綱』と田岡嶺雲」（前掲注3川合康三編『中国の文学史観』所収）及び三浦叶『明治の漢学』（前掲注5）第二部「漢学者の研究と活動」第一章「新漢学者

（赤門文士）とその活動」に詳しい。

（11）大町桂月については、『明治の漢学』（前掲注5）第一部「明治の漢学論」第六章「明治の文士・評論家の漢学観」「二、大町桂月の漢文論」に詳しい。

（12）田岡嶺雲については、『明治の漢学』（前掲注5）第一部「明治の漢学論」第六章「明治の文士・評論家の漢学観」「三、田岡嶺雲とその漢学論」に詳しい。

（13）十五冊の内容、著者、刊行年は以下のとおりである。

巻一『叙論・荘子・孟子・韓非子』（藤田剣峯、田岡嶺雲、笹川臨風、白河鯉洋、明治三十年）／巻二『白楽天』（大町桂月、明治三十年）／巻三『李笠翁』（笹川臨風、明治三十年）／巻四『蘇東坡』（田岡嶺雲、明治三十年）／巻五『湯臨川』（笹川臨風、明治三十一年）／巻六『元遺山』（笹川臨風、明治三十一年）／巻七『陶淵明』（白河鯉洋、明治三十二年）／巻八『屈原』（田岡嶺雲、明治三十二年）／巻九『杜甫』（笹川臨風、明治三十二年）／巻十『高青邱』（田岡嶺雲、明治三十二年）／巻十一『司馬相如』（藤田剣峯、明治三十三年）／巻十二『司馬遷』（藤田剣峯、明治三十三年）／巻十三『王漁洋』（田岡嶺雲、明治三十三年）／巻十四『曹子建』（笹川臨風、明治三十三年）／巻十五『韓・柳』（久保天随、明治三十七年）である。巻十五には、総目次が付され、以下も巻十六『李白』、巻十七『陸放翁』、巻十八『宋景濂』、巻十九『李夢陽』、巻二十『結論』が刊行予定のものとしてあげられているが、出版された形跡はない。

（14）各書の内容及び日本の中国文学研究史上における価値については、前掲注10竹村則行の論考に詳しい。

（15）『支那小説戯曲小史』については、西上勝「人情の探求と小説史の構築―笹川種郎『支那小説戯曲小史』をめぐって」（前掲注3川合康三編『中国の文学史観』所収）に詳しい。

（16）宮崎繁吉については、飯田吉郎「明治期の中国戯曲・小説研究の先駆者―宮崎繁吉のこと―」（『清末文学言語研究会会報』第三号、一九六三年）に詳しい。

（17）『明治の漢学』（前掲注5）第二部「漢学者の研究と活動」第七章「明治年間に於ける中国文学史の研究」において、

『冨山房五十年』一九三六年において古城が述懐した言葉として指摘されている。

(18) 藤田には「支那小説の起源を論ず」(『帝国文学』第七巻第五号、明治三十四年所収)という論考もあるが、これはほぼ『支那文学史』の内容と重なる。

(19) 『中国の文学史観』(前掲注3)所収。

(20) 彼らの活動については、『明治の漢学』(前掲注5)第二部「漢学者の研究と活動」第一章「新漢学者(赤門文士)とその活動」に詳しい。

(21) 「久保天随先生について」(筑摩書房『明治文学全集』四一、一九七一年、月報)。

(22) 笹川臨風「帝国文学発刊の前後」(『早稲田文学』第二四三号、大正十五年四月所収)。

(23) 三浦叶『明治漢文学史』(汲古書院、一九九八年)下篇「明治文学と漢文学」第六章「明治の文学雑誌と漢文学」一「『帝国文学』と漢文学」。

(24) 前掲注19。

(25) 『東洋哲学』第四編第六号(明治三十年八月)「新刊批評」「先秦文学と支那文学史」においても同様の指摘がある。